



Data 2023-84

監督: アリス・ディオップ

出演: カイジ・カガメ/ガスラジ
ー・マランダ/ヴァレリー・
ドレヴィル/オーレリア・プ
ティ/ロベール・カンタレラ
/グザヴィエ・マリ/サリマ
タ・カマテ/トマ・ドゥ・プ
ルケリ/アダマ・ディアロ・
タンバ/マリアム・ディオッ
プ/ダド・ディオップ

👁️👁️ みどころ

法廷モノの名作はアメリカにも日本にも多い。また、ドイツには『ハンナ・アーレント』（12年）という“裁判傍聴記”の名作があるが、さてフランスは？

2016年6月21日付AFP通信は、生後1年3ヶ月の娘を浜辺に置き去りにし溺れ死にさせ、計画殺人の罪に問われた母親のニュースを伝えたが、それに注目し、映画化したのは、犯人と同じルーツを持つ“セネガル系フランス人”の女性監督アリス・ディオップ。彼女は“母性”という観点から同事件を徹底的に検証し、本格的法廷モノに挑戦！

日本は2009年から裁判員制度を取り入れたが、アメリカは昔から陪審制、フランスは昔から参審制だ。参審制に馴染みのない日本人は、本作の“法廷劇”は理解しづらい。その上、クライマックスになる、弁護人による“最終弁論”は一体ナニ？日本では「証拠に基づき陳述しなければならない」はずだが、あの哲学性、あの高尚性はどう理解すればいいの？これを聞いた被告人が嗚咽したのは当然だが、女性の裁判長や参審員たちの目にも涙が・・・。

“法廷モノ”のラストは判決言い渡しシーン！ハリウッド映画でも邦画でもそれが定番だが、“呪術による犯罪”という論点まで浮上した本作の結末は如何に？フランス発の難解な“法廷モノ”だが、母親による“わが子殺し”という超難解なテーマ（事件）を巡る、本作の問題提起をしっかりと受け止めたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ヴェネチア絶賛！事実に基づき“ある被告”に焦点を！■□■

アメリカ人女優ケイト・ブランシェットは、『TAR ター』（22年）で第95回アカデミー主演女優賞にノミネートされながら、惜しくも『エブリシング・エブリウェア・オー

ル・アット・ワンス』(22年)『シネマ52』12頁)のミシェル・ヨーに敗れたが、審査員長を女優ジュリアン・ムーアとする第79回ヴェネチア国際映画祭では、審査員たちはケイト・ブランシェットに主演女優賞を与えた。そして、本作に銀獅子賞(審査員大賞)を与えるとともに、セネガル系のフランス人女性監督アリス・ディオップに新人監督賞を与えた。さらに、本作は第96回アカデミー賞のフランス代表とされ、2023年度セザール賞最優秀新人監督賞にも選ばれたからすごい。

サントメールはフランス北部にある町の名前だがなぜそれが本作のタイトルに?また、“ある被告”とは一体誰?チラシには、「真実はどこ?あなたは誰?」の文字が躍り、セネガルに生まれフランスに留学してきたという主人公の女性ロランス(ガスラジー・マランダ)の姿が写っているが、彼女はなぜフランスの法廷の被告席に座っているの?

■□■久しぶりに本格的法廷モノを!フランスの裁判制度は?■□■

2024年に弁護士生活50年となる私は“法廷モノ”をたくさん評論し、『名作映画から学ぶ裁判員制度』(10年)と『“法廷モノ”名作映画から学ぶ生きた法律と裁判』(19年)を出版した。日本では昔から法廷モノの名作があったし、2009年に「裁判員制度」が導入された直後はそれを取り入れた法廷モノが増えていたが、近時は本格的法廷モノはめっきり減り、バラエティ的(漫画的)なTVの法廷ドラマが増えている。洋画でも近時、本格的法廷モノは少なくなっているが、久しぶりに本作で本格的法廷モノを鑑賞!

本作冒頭、暗いスクリーン上に、2016年6月21日付AFP通信が配信した、次のニュースに基づく浜辺の風景が登場する。

生後1歳3か月の娘を浜辺に置き去りにし、溺れ死にさせたとして計画殺人の罪に問われている母親の裁判が20日、フランス北東部サントメールで始まった。母親は自らの犯行について「魔術」のせいと言う以外に説明のしようがないと主張した。

出廷したのはセネガル出身のファビエンヌ・カブー被告(39)。幼少時代はダカールで裕福に育ち、留学したパリで30歳年上の彫刻家と恋に落ちた後、2人の中の娘を2011年8月に出産した(筆者注・正しくは2012年8月に出産)。

しかし、2013年11月、パリの自宅から1歳3か月の娘を連れて仏北部のリゾート、ベルクシュルメールまで出かけると、娘を浜辺に一晚置き去りにし死なせた。幼女の遺体は翌朝、地元の漁師によって発見された。(以下略)

もともと、“何でも説明調”の近時の邦画と違い、説明を最小限しかしてくれない本作では、その意味を正確に理解するのは難しい。それに続くのは、セネガル系のフランス人の女性ラマ(カイジ・カガメ)が大学で講義をしている風景。彼女の授業のテーマは「マルグリッド・デュラス」で、「ヒロシマ・モナムール」を取り上げ、学生たちに大きな問題提起をしているようだが、この女性は一体ナニ?

「ナチスもの」「ヒトラーもの」の名作であり、かつ「法廷モノ」の名作でもある『ハンナ・アーレント』(12年)『シネマ32』215頁)は、アメリカに亡命した女性哲学者

が「アイヒマン裁判」の傍聴記で書いた「悪の凡庸さ」に注目した映画だったが、本作はラマによる“ある被告”＝ロランスの殺人事件の法廷傍聴記だ。しかし、ラマはなぜそんな行動を？

■□■日仏の法廷の違いに注目！参審制とは？女性の活躍は？■□■

大岡昇平の骨太推理小説を、野村芳太郎監督が映画化した『事件』（78年）は、裁判員制度の教材としてもピカイチの映画だった。当時としては珍しい本格的法廷ドラマである同作では、起訴状朗読、冒頭陳述、証人尋問、論告・求刑、弁論という刑事裁判の一連の流れに沿って、“殺意の立証”という難解なテーマが描かれていた（『名作映画から学ぶ裁判員制度』92頁）。

ところが、本作の法廷シーンのほとんどは、裁判長が質問し被告人ロランスがそれに答えるスタイルのもの。したがって、そこでは日本の“法廷の華”とされている丁々発止の主尋問、反対尋問のぶつかり合いというダイナミックな攻防戦は全く見られない。また、そこでは検察官や弁護人による被告人への質問は補充的にならざるを得ないが、ホントにこれでいいの？さらに予審判事への質問のシーンになると、弁護士歴49年の私ですらフランスの裁判制度はチンプンカンプン。そして、異和感がいっぱい！

ちなみに、本作のパンフレットには、金塚彩乃氏（弁護士／本作字幕監修）のコラム「映画の背景：植民地・言語・女性・司法・・・投げかけられる問い。」がある。日仏の資格を持つ数少ない弁護士である彼女のこのコラムは必読！ちなみに、そこでは裁判長や弁護人など女性の活躍ぶりが詳しく書かれているが、日仏のその違いにビックリしたのは私も全く同じだ。さらに、私が日仏の裁判制度の違いとして最も強く意識したのは、本作ラストのハイライトとされている女性弁護士ヴォードネ（オーレリア・ブティ）の最終弁論。日本の最終弁論は、あくまで「証拠に基づき陳述すること」が要求されるが、本作に見るそれは何とも哲学的なものだから、その違いにビックリ！

■□■私は無罪！セネガルの留学生の夢と希望は？仏語は？■□■

私は中国から日本にやってきた多くの留学生たちの夢と希望、そして彼ら彼女らの日本語能力をよく知っている。しかし、本作に見る、セネガルからフランスに留学し、完璧な美しいフランス語能力を身につけたロランスの夢と希望は？

若き日の彼女の留学に賭けた夢と希望、そして法律を勉強するために留学したにもかかわらず、専攻を哲学に変えたため、人生設計が大きく狂ってしまった彼女の半生記は、法廷の中で裁判長とロランス自身の口から語られるが、なぜそんなことになってしまったの？私に言わせれば、それは30歳以上も年の離れた白人男性リュック・デュモンテ（グザヴィエ・マリ）と知り合い、同居を始め、子供まで生んでしまったためだが、ロランス自身は「なぜ自分の娘を殺したのか？」との裁判長の質問に対し、「わかりません。裁判で知りたいと思います」と答えているとおり、本当に自分がなぜ自分の娘を海辺に置き去りにした挙句、死亡させてしまったのかについてわからないらしい。そのため、ロランスは

無罪を主張し、「私に責任があると思いません」と述べたわけだが、ヴォードネ弁護士への受け止め方はともかく、日本の弁護士歴50年近くになる私には、その主張は到底無理！案の定、本作の題材となった実際の裁判では、2016年6月24日に被告ファビエンヌ・カブーは20年の懲役刑となるが、控訴審で懲役15年の判決が下され、8年間は精神科による治療を受けることが命じられたそうだ。

もっとも、アリス・ディオップ監督にとってはそんな現実はどうでもよいことで、本作で問いかけていたいのは、もっと哲学的なもの、もっと根源的なものらしい。それは何かというと、母性だ。そのことは、第1にロランスの母親（サリマタ・カマテ）とラマとのさまざまな会話の中で、第2に本作の途中からラマが妊娠していることを見せることで、そして第3に本作ラストのヴォードネ弁護人の最終弁論の中で明らかにされるが、その内容はあまりにも難解。男の私には到底理解不可能かつ深淵なものだ。

本作はそんな根源的な問いを内包した法廷モノだから、裁判冒頭の「なぜ自分の娘を殺したんですか。」の問いと、それに対する「わかりません。裁判で知りたいと思います」の答えも、単なる法廷技術ではなく、人間の本性に対する哲学的な問いかけの中で理解する必要がある。

■□■夫婦仲は？私の子か？最悪の状況下、呪術に依存？■□■

1960年代後半の私の大学時代には、学生運動に明け暮れ自主的な生き方に固執する仲間たちの中に、学生結婚をし子供まで産んだカップルもいたが、他方で子供を産み育てる勇気を持たず、墮胎（人工妊娠中絶）するカップルも多かった。セネガルからの留学生ながら、完璧なフランス語を操るロランスは超優秀な留学生だから、そのまま法律を専攻していればヴォードネ弁護士のようになれたかもしれない。ところが、専攻を哲学に変更したばかりに、さらに30歳以上年上の男性と同棲し、子供まで産んでしまったばかりに、ロランスの人生は暗転し、今は被告人席に！

そんな裁判で、リュックがロランスの弁護のために期待される証言はいろいろと予想できるが、本作中盤に見る彼の証言はアレレ、アレレ……。子供の父親であるリュックはロランスを誰にも紹介せず、エリーズ（愛称リリ）と名付けられた娘についても、リュックはロランスに対して「私の子か？」と聞いたそうだ。そんなロランスの証言に対して、リュックは「紹介しなかったのは、ロランスが年寄りとの関係を恥じていると思ったから」、「娘が生まれてからは、毎朝よく散歩した」等と証言したから、一体どちらが真実なの？ また、ロランスが「出産前の1年は最悪だったから、呪術に頼った」と証言したが、裁判長は彼女が呪術師に会った記録も、連絡をした記録もないと指摘。さらに検察官は、「刑を軽くするためにロランスが嘘をついている」と糾弾したから、呪術に関するさまざまな証言も一体どれが真実なの？

■□■登場人物も法廷も証言も最難解！本作の結末は？■□■

日本人にはセネガル系フランス人と言われても全くその想像がつかない。したがって、

本作の主人公になる2人のセネガル系フランス人女性については、再三アップの表情が登場し、その心理状態の分析を要求されるが、日本人にはそれは難しい。このように、日本人には2人のヒロインへの違和感が半端ないから、ロランスが“我が子殺し”（海辺への置き去り）に至った動機や背景は全く理解できない。まさか、本当に呪術によるものとは思えないから、私は本作鑑賞中、何度も首をひねったものだ。

その上、前述したように、本作ラストはヴォードネ弁護士による、何とも哲学的かつ高尚な最終弁論となり、女性の裁判長や参審員たちはそれに涙しているから、私的には本作は今まで見てきた法廷劇の中では最難解！あの見事な最終弁論にロランスも思わず嗚咽してしまった後、判決は一体どうなるの？私にはそんな興味が膨らんだが、さて、それに対する本作の回答は？

映画にはすべての物語を完結させるタイプのものであれば、結論を示さず、それを観客に委ねるタイプのももある。本作は後者の典型だが、本作の結末では、この裁判の一部始終を完璧に傍聴したラマは無事に出産を終えているの？また、『ハンナ・アーレント』のように、ラマの手による裁判の傍聴記は出版されているの？そんな点にも興味を抱きながら、本作の何とも中途半端な結末(?)を、しっかり味わいたい。

2023（令和5）年7月20日記